

訪問看護と地域との連携

坂本 由規子 赤穂市民病院（赤穂市訪問看護ステーション）

訪問看護に携わって12年。多くの療養者や家族へ看護を提供するとともに、かけがえのない出会いや学びを得ることが出来たと思っている。最初は一人一人に合った看護を、決められた訪問回数や時間の中でどうしてよいのか悩んだ。そして訪問看護が何をするのか、何ができるのか、どのようにするのかを療養者や家族だけでなく、退院を前にした病院訪問で、同じ看護職に対してもきちんと伝えることが出来なかったと思う。

でも今は、訪問看護師は在宅において、生活がわかる医療職であると自信をもって答えることができる。療養者やその家族の望む生活、今までの生き方、価値観を、疾病や障害を抱えながら、どのように取り入れ、折り合いをつけ、安心して過ごすためにはどうしたらよいか、生活に医療と介護を無理なく取り入れる方法を誰よりも考えられる専門職であると考えている。

看護師は患者に一番近く、患者の代弁者として、医療チームの中での調整役割を果たすことが必要と教わってきた。在宅においても多職種・多施設・多くのサービスからなるケアチームが存在する。在宅医療を担う医師やケアマネジャー、訪問介護、訪問入浴、デイサービスやデイケア、ショートステイ事業所における看護職や福祉職、介護職、リハビリテーション専門職、医療機器メーカーや薬剤師、栄養士、歯科医師や歯科衛生士、保健師など多くの専門職と関わることもある。時には近所の方や民生委員、自治会、行政へ働きかけることもある。訪問看護師は、そのような在宅療養者を支援するためのチームにおいても、調整役としての機能を果たすことが多い。

実際療養者や家族が在宅療養を選択することへの迷いや葛藤は大きく、在宅療養中であっても常に消えることはないと感じている。今後の見通しがわからないことへの不安も大きいだろう。そのような療養者や家族の思いを聴き、療養者の病状を的確に観察や評価を行い、病状から予測される状態を、医療と生活面から考え、チーム内に伝える訪問看護師の果たす役割は大きいと考える。療養者や家族に、訪問看護師の考えをわかるように説明し、医師や多職種にも報告や伝達することで、チームとしての機能が高まる。また病院における退院支援においても訪問看護が早期から関わることで、在宅療養に向けた医療処置や介護方法をシンプルにアレンジする提案ができる。さらに入院時や在宅療養後の情報提供を行うことで病院の看護師とも連携を図っている。

24時間365日在宅療養者や家族を支えている訪問看護師だからこそ、所属組織がそれぞれ異なる在宅チームの中で、ケアマネジャーと一緒に、あるいは違った視点で、療養者や家族が望む生活をマネジメントしている実際をお話したい。

また、地域において、顔と顔がわかる関係はもちろんのこと、お互いの考えることも理解でき、信頼できる関係にまで広がってきている実感がある。しかし、訪問看護師以外の看護職の顔は、まだ一部しか見えていないと思っている。デイサービスや入所施設における看護職とどのように連携し、看護を継続していけばよいのかもディスカッションを通して考えることが出来ればと思っている。